

あまのこね

(番外編「あまのこね」)

1. やさしいね

「はい、どう？」

鏡越しに少し腰をかがめ、彼の顔の隣から自分も顔を覗かせる。壁全面の鏡に、自分の見慣れた顔とそれよりも断然端正な顔が並んでいる。美容院の鏡は明るい照明と普通の鏡以上にゆがみがないから、真っ向から見ることに抵抗のある人も多い。自分もその一人だったが、仕事だから随分前に慣れてしまったものだ。だが、隣にいる人物も恥ずかしげもなく真っ直ぐと自分の顔を眺めていた。かすかに眉間にしわをよせ、目には力がこもっている。燃え滾るような目、という言葉がふと浮かんだ。声がかげづらい。

ぷっと吹き出す声が出て鏡越しに視線を移すと、同僚の宮瀬（みやせ）が俺たちの後ろを通り過ぎるところだった。近くにいたアシスタントの森（もり）も笑う。

「なんだよ宮瀬」

「べつに、九条（くじょう）さんと竜胆（りんどう）くんの顔の大きさが全然違うとか思ってませんよ？ 竜胆くんの隣にならんじゃったらさすがの色男の九条さんも形無しですよ」

「うるせーな。竜胆くんのイケメンと俺のイケメンは別物」

「俺よりも九条さんのが全然イケメンだよ」

彼――竜胆が穏やかな声を出したのでほっと胸をなでおろす。鏡越しにもう一度目をあわせた。彼は自分ではなく俺の目を見ており、なんの力もこもっておらずごく年相応の顔をしていた。さっきの陰しさはどこにも感じさせない。

こういうの、なんていうの、と竜胆が尋ねるのでアシンメトリーっていうんだよ、と説明してやる。前はオレンジのレベルが高い色にしたが、今回はアッシュを混ぜたから落ち着いた色になった。秋っぽくなったでしょう、という、と、そうだね、と頷いた。

お会計を終え、店の前で軽く立ち話をする。俺も身長は低い方ではないのだが、俺よりも身長のある竜胆は少し首をこちらに傾けている。見れば見るほど男前だ。

「九条さん知ってた？ 竜胆って秋の花なんだよ」

「へえ、さすが名前についてるだけあんな。由来って、何？」

「……聞いたこと、ないな」

大通りが目の前にあるから交通量が多く、自然と声を張り上げる形になってしまう。彼はまた眉間にしわをよせていた。声が聞きとりにくいせいだろうか。トラックやらタクシーやらが走り去っていく。

「電車？ そういえば、高校も電車で通ってたっけ？」

「……え」

「ん？」

「あ、じゃ、俺行く。ありがとうございました」

「いや、たぶん三ヶ月ぐらいで形変わっちゃうから気が向いたらおいで」

「うん」

軽やかに去っていく。白いプリントTシャツと、細身のジーンズに綺麗に染まったやわらかい髪

の毛がそよいでいる。日差しはまだ強いが、風の温度は秋のそれだった。少し離れたところで彼がぐるりと振り向く、手を振った。振り返す。

「ちゃんと三ヵ月後に来てくれるって、竜胆くん、そうとう九条さんになつてますよね」

閉店後、宮瀬と俺とで掃除をしていたときに彼女はほうきをはく腕をとめ、苦笑しながらそういった。森もそうかも、と頷いている。俺は雑誌の間に挟まった毛を払いながら彼の顔を思い浮かべる。お世辞ではなく、本当に整った顔をしている。最初はモデルか何かかと思ったぐらいだ。しかも外国人風というわけではなく、純日本風の顔をしていて正統派のイケメンだ。

「そうだな、なんか一人っ子らしいから兄ちゃんでもほしいんだろ」

「どうかなあ。高校生っていうけど、あんなしっかりした顔立ちの高校生も珍しいですよ。着物似合いそう。剣道部とかかな、面からあんなイケメン見えたら大人気でしょうね」

「妄想やめなさい、妄想を」

彼女からほうきを半ば奪い取るようにして、床を掃く。森は奥からモップを取り出して俺がはいた後ろを追いかけるようにして拭いている。宮瀬はまだ言い足りないと言う雰囲気を残しながら、ワゴンも隅によせた。完了。電気を消す。小さな電気だけでほんのり暗い店内は外から入ってくる街灯や車のヘッドライトでたまに明るくなったりする。赤くなったり白くなったりするその灯りはスポットライトに似ていた。

「でも、私の勘違いだったらいんですけど」

「何の話だよ、かえるぞ。森、もういいぞ」

バックヤードを整理していた森が出てくる。俺も宮瀬も森も店から出て裏口を閉めた。鍵を宮瀬に渡す。

「竜胆くん、だんだん険しくなっていくと思いませんか。顔とかが」

「とかってなんだよ、とかって」

「森くんも思わない？あ、竜胆くんの初めのころとか知らないのか」

「どっちにしろ、そんなことないよ。たぶん」

「でも、今日髪の設定が終わったときの顔、尋常じゃなかったですよ。思わず怖くて引きつったけど、これじゃやばいと思って」

森は黙って考えているようだが、そんなことはどうでもよかった。いちいち客をそこまで慮ってはいられない。確かに、あの目やあの雰囲気は引っかけられないでもなかったが、そこまで詮索する権利は俺たちにはない。所詮客なのだ。そして俺たちは所詮店の一従業員だ。

宮瀬の言葉には答えず、駐車場に向って歩き出す。九月も終わりを迎えるこのごろ、昼もそうだが、ことに夜の風は一気に冷たくなった。まだ湿り気はあるが、夏の湿度とは質を異にする。と思う。駅から徒歩数分で近くて車どおりのある目立つ場所、ということもあってかそれなりに繁盛している店だが難をつけるなら駐車場が遠い。冬はこの十分が体にこたえる。この先の寒風を考えるともう鼻水が出そうだった。

「じゃあ、気をつけて帰れよ」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

宮瀬も森も自転車できてる。俺だけが少し遠いので車だ。二人が見えなくなるのを見送って、車に乗り込んだ。薄着すぎたのか、乗った瞬間にくしゃみをした。

エンジンが温まるまではしばらく待っている。轟音がしずかなエンジン音に変わってからアクセルをゆっくりと踏み出した。夜の街をなんとはなしに眺めながらアパートへと向かいながら宮瀬が妙に言うものだから、竜胆のことを考えていた。

確かに高校生にしては物腰も落ち着いているし、どこことなく大人の風格を帯びている気がしないでもない。それでも、彼が学ランでもブレザーでももちろん剣道着でも、学生生活をしていることを想像するのは難くない。まああの険しくて滾った目には少し驚かないこともなかったが、どうせ彼女とかそういう事情だろうと思う。俺だってあんなときはあったろうし、宮瀬も森も、高校生のときはきっとあんなもんだったはずだ。

もし三ヵ月後、いつもと同じように来たならば少しからかう感じで問うてみるかという気にもなる。話したくなかったら話さないだろう。

予想はずれ一ヶ月もたたないうちに、竜胆は店にやってきた。しかも閉店後、ざんばら頭で。

掃除も終わり、店長と店長の奥さんと今後のフェアなどについて考えているときだった。とはいえ、もう夜も遅かったし宮瀬も眠そうだったのでお開きにするかという雰囲気の中、大通りに面している出入り口が割れんばかりの勢いで叩かれた。全面ガラスになっていおり、かすかに明るい向こう側に竜胆が立っていたのだ。皆が驚いてスツールから立ち上がる。

「おい、どうしたの、ええ？」

店長が半ば叫ぶようにして眩きドアをあけると、彼は叩いていた勢いそのままに中に入ってきた。深夜の空気や排気ガスのおい、そして車が走っていく音や振動がそのまま店を満たす。電気をほとんど消してしまって、昼間よりもぐんと照明の落ちた店内だったが、彼の髪の毛がムラのある黒に染まっただけでなかつざんばら頭ということがはっきりわかる。誰もが驚いて何もいえないようだった。

「ごめんなさい、ここしか思いつかなかったんだ」

「何、どうしたの、何があったの」

眠気もとんだのか、目をまん丸にして宮瀬が彼の肩に手を置く。が、間髪いれずに彼が彼女の手を振り払った。よけいに目をまん丸にする宮瀬。目玉落ちるんじゃないか、というほど驚いている。俺も情けないことにそれを見ているしかなかった。

何より彼のまとう雰囲気が尋常ではない。本当に高校生なのだろうか。

二十九年間、何事もなく穏便に暮らしてきた俺だがああ、これが、と思った。これが、殺気というもののなのかもしれない。

「竜胆くん、何があったの」

「いや、本当にすみません、すぐに帰りますから」

「でも」

「すみません、もう大丈夫です」

きっぱり言い切る。言葉には、見えない棘がある。自分からここに来たくせに、と思ったのは随分後のことで、その時は何も言い返せなかった。

彼は深々とお辞儀をすると、店からまた飛び出していった。ガラス越しに彼の姿が大通りを走る車のヘッドライトで照らされるのがわかる。ふと、路肩に黒い車が止まって竜胆がそれに乗り込んでいった。あっという間の出来事だった。

誰も、何も発しない。ただ宮瀬が何かもにやもにやといい、その場にへたり込んでしまった。

「昨日はすみませんでした」

次の日の開店時間少し前に、竜胆が菓子折りをもってやってきた。髪の毛は雑だったがやはり黒くなっており、アシンメトリーだったはずの髪の毛はいつのまにかざっくばらんに切られていた。頭の色に合わせたのかは知らないが、黒いスーツに黒いネクタイをしている。法事でもあるのか。昨日は気づかなかったが、口元には紫色の小さな痣があるのに気づく。

「いや、あの、大丈夫だったか」

幸い開店から一時間は予約も入っておらず、従業員も俺一人だけだ。気休めになるのかかわからないが、まあ常識的に考えて誰もが口にするだろう一言を投げる。竜胆は顔をあげ、かすかに赤い目で俺を見る。どうしていいかわからず、目をそらした。

「本当ご迷惑をかけました」

「はは、驚いただけだしみんな心配してたから。安心したよ、元気そうだし」

口元の痣に触れるか触れまいかと逡巡して、やめた。従業員と客の関係だ。

「じゃ、俺行きます」

「あ、竜胆くん」

自分でも呼び止めてしまったのはまったく不測のことで思わず驚いた顔をしてしまったが、彼も同じく不測だったらしく同じように驚いた顔をしている。頬にもうっすらとだが青い痣があった。もしかして虐待か？自分では想像しようもないような事態が、言葉だけ流れていく。ふれてもいいのか。

腕をつかんだまま考え込む俺をよそに、竜胆は高らかに笑った。屈託のない笑顔だ。さっきまでの張り詰めた表情は綺麗さっぱりどこかに消えていた。

「九条さんが呼び止めたのに、そんな予想外みたいな顔をしないでください」

「いや、ああ……その髪の毛じゃあちょっと学校に行くのはどうかと」

「学校……ああ、いえ、別に気にしないです」

「時間、あるんだったら少しだけでも整えるよ。カラーはできないけど、カットぐらいなら」

「悪いです」

「いいよ、一応スタイリストとして許せないしな」

彼はもう一度笑い、心と大通りの方に視線を飛ばす。昨日と同じような黒い車が止まっていて、そっちを見ているようだった。かすかに頷く。その横顔は高校生ではない。ただの男だった。よくよく考えると黒いスーツもなじみすぎている気がしないでもない。竜胆はこちらに向きなおし、お願いします、と笑った。

何を話して良いのか、さっぱり分からないまま竜胆のセットは終わった。今までどんなことを話しながら、髪を切り染めていたのだろう。すっかりわからなくて、黙々と作業に徹した。

ケープをはずし毛を払う。髪の色は相変わらずムラのある黒だったが、形はすっかり綺麗に整った。彼が女だったら好みの毛質だ。鏡越しに目が合う。険しくなかったが穏やかでもなく、ただ見られている。何を考えているのかわからない。はじめて、彼に対してえも言われぬ違和感を感じる。竜胆がそのままで口を開く。

「俺さ、兄ちゃんがほしいって何度も思った。強くてかっこよくてさ、俺のこと守ってくれ

んの」

「……なあ、竜胆くん、」

「あ、勘違いしないでください」

彼は立ち上がる。至近距離で見てわかったが、彼の身につけているスーツはかなり良いもののようだし革靴もぴかぴかに磨き上げられている。新品なのかもしれないが、履きこなれた感じがある。良家のお坊ちゃんなのか、あながち着物も間違っていないかもしれないよ、宮瀬。

「虐待とかじゃ、ないですよ。まさか。やり返せるぐらいの力だって俺にはあるんで」

「そんな、お前、」

「俺との距離、はかりかねているでしょう」

相変わらず何を考えているのかわからない目をしている。俺よりも背の高い彼はこっちを覗きこんでくる。こいつ、何だ。

「ありがとうございました」

彼はレジ前のカルトンに一万円札を一枚、ポケットから裸のまま取り出して優雅に置いた。多いとかいらんとか言うまえに竜胆は颯爽と去っていき、外に止まっていた黒い車に乗っていた。彼が来て一時間近くが経っていたが、その間ずっと待っていたのだ。横目で何度も確認していた。お迎えだったのか、彼はどこに行ったのだろう。

こんにちは、と女性が入ってくる。いらっしゃいませ、ときこちない笑顔を向けた。

十月も終わりに近づいた頃、雨が降って異常なほど冷え込んだ。もう真冬かというぐらいの寒さだ。かさを持つ手がかじかむ。この仕事についてから、荒れるのにもなれて手の皮も丈夫になっていたつもりだが寒さには弱い。ジャケットの前を掻き合せながら早足で歩く。ざくざくとアスファルトを踏みしめる音に、雨が跳ねる音が重なる。足先からもひやされていくようで、車に早く入ってしまいたい。宮瀬も森も、今日は雨だからと電車できていて駅は反対側だ。黙々と歩く。

「九条さん」

びくりとして振り返る。雨にぬれる竜胆が立っていた。

白いワイシャツに下は暗くて良く見えないがスラックスのようだ。通り過ぎる車が彼を、彼の頬にできた大きな紫色の痣を照らす。

一ヶ月かそこらぶりだったが、彼のまとう雰囲気は今まで以上に険阻としておりどうしたとか、当たり前という言葉が出てこない。鬼気迫る、というのはこういうことを言うのだろうか。髪を誰かに刈り取られて店に飛び込んできたとき以上の凄みがある。ただ、たまに照らされる彼は、孤独のようにも見えた。

「頬、冷やすか？」

竜胆が無言で頷く。氷を袋に入れてやり、タオルを渡した。風呂上りで血色もよくなっていたが、そのぶん頬は鈍く痛むだろう。俺も、一度親父に拳でなぐられたことがあって、理由は覚えてないもののあの痛みは覚えている。母が冷やすために保冷材をくれたけれど、頬に触れるだけ

で痛かった。疼痛と鈍痛と、それとかすかな血の味。しばらく続くはずだ。だが彼は眉一本も動かさず、タオルをそっと頬に当てる。じっとテーブルの一点だけを見つめていた。入れてやったコーヒーも冷めてしまっている。まだ乾かしていない頭から、ぽたりと一粒だけ水滴が滴った。

今まで、髪の毛を切ったときに彼とどんな話をしていたら。他愛もない話だったはずだが、話しづらいとか話が合わなくて苦労したとか、そんなことは思わなかった。たまに高校生ぐらいの子と話すと、話をあわせるのに苦労するのだが竜胆にはそれがなかった。それは仕事として接している俺と同じぐらい、彼は俺に大人な対応をしていたからだろうか。今日はいっていたスラックスも、制服のものとは思いがたい。聞いていいのか、聞かないほうがいいのか。

「九条さん、考えてるでしょう」

「何、を」

「俺のことを。家にあげなきゃよかったって」

「あの状況で見捨てるほど、俺は非情じゃないよ」

あの状況で、アパートにつれてくる以外どんな選択肢があったというのか、むしろこっちが教えてほしい。ほったらかしにするわけにもいかないし、家まで送るといっても頑なに拒む。雨にぬれてこの寒さだ。風邪を引かれてはたまらない。思わず腕をつかんで車にのせ、風呂にいれたのだった。

「……そうだね、九条さんはそんな人じゃない」

「お前なあ」

「九条さんに会いたいと思ったんだ」

竜胆が顔をあげる。俺を見ている。真っ直ぐに俺を見ている。鏡に映る自分をみていたような棘刺しさはなく、かといって何を考えているのかわからない目でもなかった。涙が浮いていたのだ。

「おい、泣くなよ」

「……親父に、殴られてさ。まあ俺もいい加減、腹くくって感じなんだけど。でも殴られて、痛くてさなんつうか、もうやんなっちゃうだろ。そうしたらどうしても、九条さんに会いたくなかった」

「竜胆くん」

「今日はまあやり返してやったから向こうにも痣できてるんじゃないかな」

彼は泣き笑いをしながら自分の手をさする。よくよく見ると殴りダコみたいに、関節の部分が変に膨らんでいるのがわかった。今までなぜ気づかなかったのだろうと思うが、彼は一度もケープの袖から手を通さず、雑誌を読むこともなかった。俺とたまに鏡越しに目を合わせては話をする。それで十分、間が持っていた。

「こういう、寒い日に殴られるとこたえるよ。それで、俺、九条さんに、会いたくなかった」

「それは、」

「うん、俺、九条さんが好きなんだ。それで、俺、男の人が好きっていう、ただそれだけ」

ずず、っと彼が鼻をすする。沈黙。俺はコーヒーを飲み干す。苦いだけで味がよくわからなか

った。竜胆は手をさすりながら、それでも俺を見ている。

「九条さんが、好きだ」

「.....言うておくけどな、竜胆くん、君はたぶんな兄ちゃんとかがほしいだけだよ。俺じゃないといけないってわけじゃなくてさ」

自然早口になる。目は見ない。テーブルを見つめる。彼がさする手を見つめる。

「まだ高校生だろう。好きな子ができたら違うよ。高校にかわいい子とか、いるだろう」

「九条さん」

「それに、俺と君は店の人間と客だしさ」

「九条さん」

彼が突然腰をうかし、俺の腕をつかんだ。がちゃん、とテーブルとテーブルにのっていたカップが音を立てる。何か砕ける音がした。氷が落ちたのだろう。彼の手は大きく、ぐいと力がこもる。痛みさえ伝わる。節くれだった指だ。すぐそこにその端正な顔が近づいていた。頬の痣が痛々しい。目が、言っている。俺を、好きだと。

「人に何かを説得したいときは目を見なきゃだめだ。目に、全部表れてる。目をそらすことは小物のすることだ。それに、もっとはっきり言ったほうがいい。自分はゲイじゃないし、男に好かれることはあまり快く思わないってことも。だから、九条さんは俺みたいな奴につけこまれんだよ」

竜胆はふっと息を吐き出し、立ち上がった。氷を広いテーブルにのせる。そしてソファにかけてあったびしょ濡れのシャツとスラックスをとる。そのポケットから携帯を取り出してどこかに電話をかけながら玄関に向うようだった。俺の腕はまだ痛い。ほうけている場合ではないと、とりあえず彼の後を追ひ、玄関の明かりをつけた。電話をし終えた彼は振り向く。ぬれた革靴をはくときに水があふれる音が、確かにした。

「帰るよ。今度、ちゃんと洗ってこのジャージは返します」

「いや、それはいいけど、」

「それとね、俺は高校生じゃないし、誰だっていいわけじゃない。確かに兄ちゃんがほしいのは本当だけどね。九条さんに髪の毛きってもらって、もう一年経つのかな。本当は毎月会いに行きたいぐらいだよ。九条さんの手、やさしくって柔らかいだろ。触ってもらうのが本当に好きだよ。与える手って、あるんだな。それに鏡越しでもなんでも、人の目見てちゃんと話すだろ。ま、最近はあるま目あわせてくれなあったけどさあ」

よく、しゃべるな、と、今考えないでもいいようなことを思う。竜胆は、こんなに饒舌なやつだったろうか。少し声が上ずっているように思えるのは気のせいかな。彼はまぶしげに明かりを見あげ、玄関のノブに手をかけた。瞬時に雨の音が響いてくる。雨の匂いがする。暗い。

その時、ぷあん、と間抜けなクラクションの音がした。竜胆が外に目をやり、その仕草で彼の迎えが来たのだとわかった。電話も、この迎えを呼ぶためだったのだろう。

「じゃ、また。今度はちゃんと予約するよ」

「あ、ああ」

「おやすみなさい。お世話になりました」

何か言う前に、彼は出て行った。玄関のタイルの上に、革靴の跡がくっきりと残っていた。

2. やさしくないね

俺の目の前には生中が二つ、お通しの枝豆が一盛り、吸殻が一本はいった黒い灰皿、そして端正な顔して鎮座している、スーツ姿の竜胆。いつにもまして男前な彼は俺の気持を知るよしもなく、というか、きっと知りきっていてそれでもなおにこりと愛想笑いを浮かべている。頬にはまだ、うっすらと痣がのこっているようだ。このまま切り取って、メンズファッションの雑誌に売りつけたら大層有名なモデルになりそうな顔だ。まだらだった黒染めも、どこか違う美容室でやったのか綺麗に染まっていて、もともとそういう色だったのかと思えるほどだ。今ではもう、アッシュに染めていた彼が思い出せなかった。

居心地が悪くて枝豆にもジョッキにも手が伸びそうにもない。金曜の夜の居酒屋だというのに、客も全然はっていないから、どうも静まり返っている。不気味だ。

「……竜胆くん、君、高校生でしょ」

「自称、ですよ」

そう答えるとまたわざとらしく微笑んで、背広の胸ポケットからシルバーのシガレットケースに入っていたタバコを一本くわえる。そして薬味の傍にあるマッチをとって火をつけた。燃えカスを灰皿にぽい、と軽く投げ入れる。一連の動作は手慣れており、やはり自称高校生か、などと考えていると竜胆とまた目が合う。その目は一寸たりとも隙がない鋭い視線を俺に投げかけてきた。思わず目をそらす。

あの日――竜胆が頭をざんばらにしてやってきた日から、もちろん彼の素性はとことん怪しいとは思っていたものの、年齢までは疑っていなかったがここまで堂々と飲酒も喫煙もするのはやはりおかしい。雨に濡れて頬に痣をつくっていたあのときも、音もなくやってきた車に乗って帰っていったあのときも、本当は、うすうす気づいていたけれど、それでも、見たくないものに蓋をしていた。彼の私情に足をつっこんだらきっと、客と店員の垣根を越えてしまうと思っていた。ここに来る前にもっと抵抗すればよかったと思うと、自然と口からため息がこぼれた。

十一月の夜気はもはや冬のそれで、店を出てすぐに体が縮こまる。朝よりも寒くなっている。小さくなって駐車場に向う途中、歩道に黒塗りの車がぴたりと寄せてきた。なんだか嫌な予感がしたが、じっとみているのも逆にいちゃもんをつけられそうだと思い、歩を早めて手元にもった携帯だけを見つめている。ボタン、とその車のドアが開くのも聞こえたがそれでも見ないふり。革靴が近づいてくる音も聞こえないふり。けれども、その足音が俺を追い越して目の前に竜胆が立ちはだかったら、見ないふりも聞こえないふりもましてや知らないふりもできない。スーツにトレンチコートという佇まいの竜胆は、一見すると誰かわからなかったが、その眼光の鋭さはこちらを射抜いている。

状況が理解できない俺にむかって彼はにっこり「ちょっと付き合ってください」と言い、俺がうんともすんとも言う前に後ろに居た大柄の男一人に半ばかかえるように車に乗せられた。手馴れた動作で、あっけにとられていた俺がふと我に帰ったときには車はもう走り出していた。車内は革張りで、もちろん黒、暖房がよく効いていてたばこの匂いが十分すぎるほどしみこんでいる

。たばこを吸わないしもともと好きではないし、それにいまだに状況が飲み込めないしで胃が気持ち悪くなる。となりに悠然と座る竜胆は、俺を放り込んで運転席に座った大柄の男にどこかに行くよう話しているようだ。その会話も終わらないうちに彼の首元に飛びついた。突然のことなのに、それでも、竜胆は平然として俺を見つめ返してくる。

「やだな、九条さんそんな怒らないで」

「これが怒らないでいられるか。俺はそんなに大人にできてないんでね。立派な犯罪だぞ。監禁だぞ」

「そんなまくし立てても。借りてたジャージと、お礼にのみに行きたいんです。それぐらい付き合ってくださいよ」

「やだよ、今すぐ下ろせ」

「いいじゃないですか。客のわがまま聞いてよ」

えらそうに怒ってみても竜胆はまったく取り合う気もないようで、走り出しているから降りようもなく、しばらく竜胆の首元をしめつけたままだったが急にあほらしくなって離れた。彼は平然と姿勢を正してふふん、と鼻で笑いさえした。すれ違う車のライトやコンビニなどの明かりにたまに照らされて浮かびあがる竜胆の顔は、俺のお得意様の彼ではなくただの知らない男だった。端正な横顔のラインが浮かび上がるたび、少し悲しい気持になるのだった。

「驚きました？居酒屋貸切って始めてでしょう」

「貸切？」

「この店ね、俺んとこの系列でね。ま、ここら一体俺たちのシマだからね」

「シマってお前……」

竜胆はふっと笑顔を消して、入り口付近にいた運転手の男を呼ぶ。驚頭、と呼ばれたその男は返事もないですっと傍に寄ってくると懐からカードケースのようなものを取り出した。それを竜胆に渡すと、竜胆はそのケースから一枚名刺を取り出したのだった。俺に差し出してくる。わけもわからず受け取って覗き込むと、いかめしい漢字がずらずらと並んでいたのだった。

「……か……？」

「かもんぐみりょうめいかいごだいめ、さかまきりんどう、以後お見知りおきを」

華門組竜明会五代目 酒巻竜胆

漢字をゆっくり目で追う。

「組……五代目っておまえ」

「先日襲名しちゃいました」

何をどうリアクションをとっていいのかもわからないまま俺は固まる。いいタイミングなのか頼んでもいないのに、つまみが続々と運ばれてきてテーブルが一気に埋まった。運んできた子は十代か二十代の女の子二人で、普通のバイトのようだった。マグロ切り落としの煮付けや揚げ出し豆腐、モツ煮込みなどの温かそうな料理に目を移して竜胆はうまそうですね、と俺に言う。

「……竜胆くん、」

「どうしました？今日は俺のオゴリですから、どうぞ？」

「いや、そうじゃなくて」

「とりあえず飲みましょ、先日はどうもありがとうございました」

「竜胆くん」

少し語気を強めた意味を読めない彼ではないだろう。料理を見ていた瞳がじれったいほどゆっくりと俺に向く。目をそらしちゃだめだ、と言ったのは彼だった。その見本になるように彼の視線はぶれることなく俺を射抜いている。俺の声に反応したのか、カードケースをしまいおえて少しはなれたところに立っていた鷲頭も横目でこちらを見ている。にらみつけているわけではないのだろうが、いかめしい顔のせいもあって思わず萎縮してしまいそうになる。彼は音もなく視線をはずしてまた入り口を見据えた。無表情にこちらを見つめる竜胆は何も言わない。情けないことに唇が震えるが、俺も目をそらしてはいけない。

「……君が、何を思ってるのかよく俺にはわからないけど、なんでわざわざ高校生だなんて嘘をついてこんな監禁まがいのこともしてさ、何がしたいんだ？」

「それは何回も言ってる。俺は、九条さんが好きなんだって、言ってるよ」

「だからって、」

「ちゃんと断らない九条さんが悪いよ。俺、諦め悪いからね。はっきり言わないかぎり諦めない。俺のイロになってください」

「い、イロ！？ば、ばかかお前」

「九条さん」

不意に伸びてきた彼の手が、テーブルの上に置かれた俺の手をつかむ。冷たい指先は、湿っていて絡み付くように俺の手を捉える。驚いて手を引こうとしたが予想以上に強い力で動くことさえ困難だった。竜胆くん、と口から情けないほどか弱い声が出るが彼には聞こえていないのか聞こえていたとしても聞き入れるようには思えない。心臓が鼓動を早くする。その指先が俺を捉えているからじゃない。その視線が俺をからめ取っているからじゃない。

ただ、俺をつかむ彼の指が腕が、かすかに震えているのを感じたからだ。力をこめているくせに、優しく触れてくる。いくら自称とはいえ俺から見れば彼の顔にはやはりあどけなさが残る。痛々しい痕の残る頬をじっと見つめる。

「九条さんに本当は、何も言わないでいようと思ってた。高校生のままでいようって、九条さんもあそこの人たちも良い人だけどちょっと間抜けだからさ、気づかなかったでしょう。けど今も言ったけど襲名したんだ。五代目。だから、もう気軽に会うこともできなくなる、し、だから、諦めようと思った、でもやっぱりさ。どうしようもないぐらい、好きなんだよ」

震える指は俺のことを離してくれない。少し眉間にしわがよった顔は、それでもやはり端正だ。互いに押し黙ったまましばらく時間がすぎる。料理からたちのぼる美味そうな匂いが次第に薄くなっていく。並んだいくつもの料理が、まるで置物のようにも見え始めた。口もつけていないビールの泡ももうほとんどなくなってしまっている。

断らねばならない。俺は男が好きな男じゃない。客と店員の垣根は越えられない。けれど、この指先から伝わる震えを思うと、彼の冷たい指先を思うと、言葉がうまく出てこなかった。切羽詰った彼の顔や、頬の痣、そういうものが俺の頭をめぐる。彼はきっと、助けを求めている。

何か。それが俺じゃないといけないのかどうかはわからない。きっと美容師という仕事の特性上、親しく話したのが俺だったからなのかもしれない。髪の毛に触れられるのはまるで体を触れられているような錯覚を与えたのかもしれない。どう、答えたら良い。

そんな逡巡を読み取ったのか読み取っていないのか、ふと竜胆の指は離れていった。解放された手は、もちろん自由になるがどこか心もとなさが残る。動かしてよいはずの手が、変にしびれて力がはいらなかった。彼は、気のせいでなければ少し泣きそうな顔をしたように見えた、が、すぐに笑顔になってごめんね、と言った。

「……ジョーダン。九条さん、そんな顔しないでイケメンがもったいないよ。怖い怖い。出よう。家まで送るよ。あ、車は店だから店のほうがいっか。飯、食べなかったな。残念。でもま、そういうもんかな」

「竜胆くん」

「九条さん、ごめんね。今日のこと、忘れてよ。別にこんなことあったからってカタギになんかするってわけじゃねえし、それに九条さんは俺の大切な人だからさ。もう髪の毛切ってもらうこともなくなると思うけど。あ、ジャージは車にあるから。送るついでに渡すからさ。ありがとね。おい鷺頭」

饒舌な言葉の間に、言葉を挟むこともできない。おそらく彼もそれを狙ってのことなのだろう。鷺頭はまた改めてこちらに向きなおり、竜胆が着ていたコートをすっと差し出した。広げられたコートに腕を通した竜胆は俺が立つのを待っているらしいが目を合わせようとは市内。俺も、まだしびれる手に気づかないフリをしてぎこちなく立ち上がった。酒も何も飲んでいないのにふらふらする。先ほどの言葉は本当だったようで、彼はレジ前で立ち止まることもなくすたすたと店から出て行ってしまった。厨房から女の子二人と店長らしい人がこちらを見ていたが、深々とお辞儀をしていた。俺はそれをなんとなく見つつ、竜胆と鷺頭の後を追う。

美容院にむかって車が発進する。竜胆はまっすぐ前を向いていて、きたときと同じようにたまたに浮かび上がる彼の横顔はやはり綺麗だった。

「……本当は、いくつなんだよ」

気まずさが募って口を開いた。竜胆がこちらを向く。相変わらずたばこくさい車内だったが、少しは慣れたようで押し込まれたときほどは気分が悪くなることはなかった。

「いくつに見える？」

自嘲的にも見える笑みを浮かべて尋ねてくる。

「俺よりは年下だろ」

「先日、誕生日を迎えました。ハタチだよ」

「それは……おめでとう。俺からみたら……高校生もなにも変わらないよ」

「カタギと一緒にしないでくれます？」

どこか開き直りとも言えるようななげやりな態度で、俺はまた少し胸が痛む。竜胆に触れられた手がまだ、少し、何か。

「……竜胆くん」

「俺のことを、そんな風に優しく呼んでくれるのも、九条さんだけだったよ」

いつのまにか車は美容院の駐車場についており、鷺頭は運転席から降りると後部座席の俺の座る側のドアを開けた。降りろ、ということらしい。外からは冷たい空気が入り込んできて、車内の暖房がかなりきいていたのだということに気づく。竜胆は反対側のドアに体ごと預けて窓の外を見ている。こちらにはちらりとも目をくれようもしない。

何か言うべきか。いや、きっと早く降りてそのまま何もなかったようにここを去って、そうしたらきっと竜胆からも連絡はもうない。客にもこない。宮瀬や森が、竜胆くん最近こないんですね、なんていって、俺もそうだね、なんて言って。もう忘れたらいいのに。お客が離れることなんてよくあることなんだ。でも。

なんで、今、俺は泣いていた竜胆の顔を思い出してるんだ。

「九条さん？」

竜胆は驚いたように体ごとこちらを向いた。車内のドアライトの柔らかい灯りの下、彼の顔は肩書きも何もなくてただの一人の青年のように、ただの二十歳の顔をしている。それほど驚いたのかもしれない。というか、俺も驚いていた。彼に触れられた、まだその感触の残る右手で、彼の腕を知らずのうちにつかんでいたのだから。質の良いトレンチコートの生地は柔らかく、さらさらとしていた。いくら力をいれようとしても、指が震える。その手に、彼の手が重なる。さっきとは違って温かな手だった。節くれだった関節が、柔らかく浮かび上がっている。

「……九条さん、そんなことされたら俺、期待するよ。付きまとうよ」

「はは……それは、困るな」

「じゃあ、なんで」

「……俺、本当はさ四兄弟の末っ子だから兄貴にはなれないよ」

「まだそんなこと、言うの」

冷たい風が車内をどんどん冷やしていくのに、俺の頭は冷静にならない。むしろ浮かされてい

くように思える。俺の右手に置かれた彼の右手。竜胆が音もなく近づいてくる。彼の両手が俺の頬を挟む。心臓がもう止まってしまいそうなほど早鐘を打つ。痛いぐらいだ。かすかに竜胆の手首から香水が香る。

「鷺頭、ドア、閉めろ」

間近に迫った彼の顔が、ふいにドアの外に向いてそう言うと返事もなくドアがばたん、としまった。鷺頭は何を思うのか、などとちらりと頭を掠めたが結論に至る前に竜胆の唇が俺の唇に触れた。

たばこのにおいが、した。

車は夜の街を滑るように走り、気づいたら日本家屋の前に横付けされていた。俺はぼんやりと景色を見ていたつもりだったが、何一つ覚えていなかった。きっと、車内の暖房に頭が浮かされたからではなくて、竜胆に握られている右手に意識が集中していたからだろう。自分でも認めがたかったが、車が美容院の駐車場を発進してから数十分彼は何も言わないまま俺の手をずっと握っていて、俺も悪い気がしないのだった。そもそも自分が離れがたくて引き止めた手だ。ずっと心臓が高鳴っていて頬も火照る。竜胆に触れられている、指が、そこから伝わる熱が、俺をずっと浮かしている。さっき触れた唇がじわりと熱を持つ。俺はこんなに女々しかったっけ、と、考えようとしても、すぐに竜胆のこと――俺を好きだと言う顔、視線、そして涙――にすりかわってまともなことなんか何も考えられなかった。

鷺頭が運転席から降りて、どこかに行っている間にまたするりと竜胆が俺の頬に触れてキスをしてくる。唇をついばむようなキス。彼の口の端から漏れる息は熱い。しばらく見つめあったが、竜胆の顔はほぼ影になってよくわからない。唯一光をともし彼の瞳には俺が小さく映っていた。痣の残る頬に触れる。髪の毛以外に触れたのは初めてだったが、予想通りすべすべとしてそこらの女性よりもきつときめが細かいだろうことが想像できる。痛くないか、と尋ねたら、平気だよ、と答える。

「……九条さん、そんな顔しないでよ」

「……は？」

「誘ってるでしょ、えろいよ」

「ばか。……竜胆くん」

「うん？」

口を開いたとき、外から窓をロックされた。肩をすくめたまま振り向くと鷺頭が覗き込んでいた。俺と目が合うと彼はドアをあけた。竜胆に促されながら車を降りる。温められた体が一気に冷やされて、気持ちが悪かった。はあ、と口からでた吐息が淡く白くなる。後ろから竜胆が出てきて、俺の腰に手を回した。そのまま押されるように日本家屋の門をくぐる。小さいがよくつくられた前庭があり、玉砂利の中に飛び石が数メートル、玄関に続いていた。ほの白い街灯を浴びて怪しく光っている。背後で車がゆっくりと発進してどこかに行ってしまう二人きりになる。だからかよけいに、竜胆が踏みつける玉砂利の音が辺りに響くようだった。できるだけ飛び石の上を歩くようにしたが、等間隔ではないから歩きにくく、結局は玉砂利を踏みならすことにな

った。

「俺の家、ってというか、部屋ってというか...離れみたいな...まあいいよ入って」

玄関の引き戸は鍵をあけないでも簡単に開く。さっき車を降りた鷲頭が鍵をあけていたのだろうと思いつく。それを問う間もなく、玄関に押し込められるように入って、竜胆は後ろ手で戸と鍵も閉めた。薄暗い玄関はそれでもかなり広く、藺草の匂いと檜の匂いがしている。ガラス戸を通して入る門灯の光に照らされた玄関のたたきが、青黒く照っていた。黙ったまま上がりかまちに腰を下ろして、暗い中目を細めながらスニーカーの紐を解く。いつも靴から足が浮かないようにと紐をきつめに結んでいるから、暗いのと手に力が入らないのとでうまく解けない。正面に立っていた竜胆はすっとしゃがみこみ、俺が解いていないほうの靴に手を伸ばす。

「いいよ」

「やらせて。ねえ、さっき言い掛けてたことって何」

「いや.....髪の毛を触りたくて」

「はっ、職業病？彼女の髪の毛、よく触るの？」

竜胆はけたけた笑った。確かに付き合った子の髪の毛を触るのは好きだったが、でも彼ほど好みの髪質はいなかった。そして、自分は興奮すると相手の髪の毛に触れたいくなる、という嗜好を思い出す。俺、興奮してるんだ。ふと顔を顔を上げると竜胆のつむじが見えるところまで来ていた。そっと靴から手を離して髪の毛に触れる。やはりいい質をしている。何度も染めたり切ったりしていたけれど、コシとツヤは失われていない。少したばこ臭いが、好きな髪質だ。髪の毛をすいていると首が動いて、少し恨めしそうに竜胆が俺を見ていた。予想以上に顔が近い。心なしか頬が赤くなっているのがこの暗さでもわかるようだった。目が潤んでいる。

「ずるいよそんな風に触るのは」

暖房も何もはっていない、戸を一枚隔ててすぐ外の玄関は寒いはずなのに、俺たちの温度はどんどん上がっていくようにさえ感じる。彼の湿った息が、俺にかかった。きっと、俺の息も彼にかかっている。自然と瞳を閉じた。唇の感覚だけで、彼を感じる。

3. いとしいね

(性的描写はいりません)

温かな舌が口に入ってきて、歯を歯茎をそして舌を、なぞっていく。女の子としばらくキスもしてなかったのに、だからか、男とでもひどく興奮している。俺は案外男でもいけるんだろうか。そんなことをかき消すように竜胆の舌使いが激しさを増して、さっきまでのキスは大分抑えていたのだとぼんやり思った。

静まり返った玄関には俺たちの絡まる音が響いている。たぶん、本当はそんなに響いてないんだろうが、こんなに静かなところでキスをしたのは初めてで耳に、つく。でも、いやじゃ、ない。座ったままキスをしていたが、だんだんと竜胆が覆いかぶさるようになってきて冷えた板張りに寝転んだ。分厚いジャケット越しでも背中に冷たさが伝わってくる。それがまた興奮を煽った。感覚が敏感になっていく。首筋に鳥肌がたった。そこに、竜胆がキスを落す。舌を這わせる。吐息がさらに俺を敏感にさせる。丁度俺の太ももに彼の股間が当たる。

「鳥肌、寒い？」

「いや……ていうか……君の固いのがあたってますが」

「やらしく髪の毛触るからだよ」

耳を噛まれる。ばか、と、払いのける手に力が入らない。ねえ、と、竜胆の吐息が耳にかかった。

「本当に、いいの。俺、九条さんがどう思ってるかも関係ないよ。俺がしたいようにするよ。いいの」

「……聞くなよ」

「九条さん、けっこう流されやすいでしょ」

「うっ、るさい、な」

「でも、それでいい」

真正面に竜胆の顔がある。うるんだ瞳は仔犬にさえ見える。まあ実際はそんなかわいいもんでもないのだろうが。今はそれでもまだ少し怯えながら、震えながら、うかがいながら俺に触れる竜胆が愛おしかった。加えて、ここまでのキスをされておきながら断れるやつなどいるのか。まともな判断なんか浮かされた脳ミソでできるわけがない。

「じゃなかったら、ここに来てくれなかったろ」

「は……どうかな」

「ねえ、俺のこと好きになってくなくてもいいからさ……今日だけはさ……」

彼の手が体にそって降りてきて、ジーンズのジッパーに指がかかる。あわてて膝を折って足を閉じたが、彼の手はそこをしっかりとつかんでいる。あっという間に片手でベルトとジッパーを下げられた。隙間から竜胆の手が入り込んでくる。

「そこはっ……」

「起ってるよ？しばらく抜いてないの？パンパン」

「聞くな、ていうかお前が言うな」

「触らせて」

大分ご無沙汰だったとはいえ、これまで女の子とセックスをしたことがある以上自分ではない他人に触られたこともある。が、やはり女の子の触り方とはわけが違う。布越しではあるが的確に刺激してくる。先端を、全体を、上を、下を。言葉にならない言葉が、咽喉からそのままあふれたような声が、外に漏れる。それに煽られたのか竜胆はさっきよりもわずかに乱暴にキスを求めてきた。わけもわからないままだ舌をからませる。

「っ……っ……りん、ど…く……ん……」

「すげえもえるよ。九条さんエロい」

彼の手がとうとう下着の中に入ってくる。腰浮かして、とささやかかれてその通りにするとジーンズと下着が太股まで下ろされた。シャツとジャケットももめくりあげられる。床も空気が冷たい、けれど、そのせいで興奮する。自分の先端からあふれる先走りの液体と、竜胆の指がこすれる音が卑猥に響いた。息があがる。男に触られている。竜胆に触れている。十も違う年下に。そういう罪悪感だか背徳感だかわからないものにさいなまれながら、彼の背に手を回していた。竜胆の手の動きがより早くなる。

「だっ…めだ………そんなっ………りん…ど……イっ…」

「いいよ、イって」

瞬間、自分でも情けない声が出た。自分のものが波打っているのかそれとも竜胆の手が震えているのかは定かではない。竜胆がまた優しくキスをしてきた。寒い中なのに、俺の鼻の頭には汗が浮いている。あはは、と彼の気の抜けた笑い声がして、閉じていた目を開くとじっとこっちを見ていた。どうしたの、と、かすれた声しかでないまま尋ねると、俺は嬉しいんだけど腕離してもらえると助かる、と言う。かなり強く彼を抱きとめていたようだった。腕を解くと竜胆は立ち上がって、着替え持ってくるから寒いけどちょっと待っててくれる、といって奥に消えてしまった。お前はいいの、などと尋ねるタイミングも失ったまま俺はだらしなくジーンズと下着を下ろして腹を出して寝転がって、知らない檜張りの天井をぼうっと眺めていた。

「ごめん、あんなするつもりなかったんだけど」

さすがの竜胆も照れているのか、あはは、と笑って俺の前にお茶を出した。なんとなく股間を見てしまったがたっているようには見えなかった。彼も着替えてTシャツとジャージだけになっているのを見ると、やはり普通の学生にしか見えない。まさか彼が組長だなんて、まったく想像もつかなかったし実感としてもわいてこない。ただ、この空間に自分がいることがそぐわないということはわかる。

着替えを取りに奥に消えた竜胆はひとまず家中の電気を全てつけた。玄関で着替えると廊下に沿うようにあった二部屋のうち、手前の部屋で待っているように言われた。床の間と座卓のある部屋だ。縁側があるようで、障子で見えないがおそらく前庭と続く中庭もあるのだろう。一番奥には台所らしく、かちゃんかちゃんと食器のぶつかる音がする。彼を待つ間、部屋全体をぐるりと見回した。襖にはいかにもな龍と虎の水墨画のようなものが描いてあって、欄間にも何かはよく

わからないが趣向をこたらしめたものがほりこまれているようだった。「華門組」という、さっき目にした文字の軸が床の間にはかかっている、すぐ下には二組の刀が置いてある。実家にももちろん和室はあって床の間もあるが、この部屋のような重厚な雰囲気はまずない。襖には何も絵は描かれていないし欄間も言ってしまうとただの格子だった。もう一度床の間に目を移してこういう画を時代劇なんかでよく見るな、脇差っていうんだっけとぼんやり思っていると竜胆がマグカップをのせたお盆を持って部屋に入ってきたのだった。

「キョロキョロして、面白いものでもあった？」

「いや……竜胆くんが本当に極道なのかと、思って、ちょっと……」

「生い立ち聞きたい？」

ふっ、と彼は鼻で笑うようにしてマグカップを持った。白い、何の模様もない殺風景なカップには少し濃い目の緑茶が入っている。豊かな香りの湯気が鼻をくすぐると、急に空腹感に襲われて腹がだらしく鳴った。竜胆が俺を見て笑い、台所からビニル袋に入ったままの蜜柑を持って来て座卓に少し乱暴においた。これでよかったらどうぞ、鷺頭が持ってきたんだけど、と付け加える。二つ三つこちらによこした手から受け取り、俺は食べ始めた。少しすっぱかったけれどすきっ腹には何でも美味しい。竜胆は蜜柑をほおぼる俺を見ていた。何を言うでもなく静かに沈黙が流れる。ときたま思い出したように天井に埋め込まれているエアコンが温風を吐く。

「俺の、竜胆っていう名前」

沈黙を苦として話し始めたというわけではなさそうだったが、彼はこちらを見ていない。じっとマグカップに視線を落している。その、愁いを帯びているような顔でさえやはり絵になるのだから男前というのは得だ。俺は少しずつカップに口をつけながら蜜柑を口に運びながら、彼の言葉に聞き入った。彼の声はいつもの険阻とした雰囲気は幾分かそがれており、少し諦めを含んだような声音だった。

「うちの家紋なんだよ。花言葉は『正義』とか『誠実』。こんな家業で何言ってんだって話だろ」

そこで大きく一口、緑茶を飲んだ竜胆から自嘲の色はぬぐえない。

「まだほんとジャリガキのときはうちのこと全然わかってなかったけどさ。親父は今も昔も怖いしうぜえし、おふくろだけが救いだった。周りにいるやつらも鷺頭みたいのばかりだったしさ、大人に囲まれた生活で当然ダチなんかできるわけもない」

まだいたいけな、おそらく愛らしい顔をしていた竜胆を囲む、鷺頭に似たり寄ったりのいかにも男たちを想像するとぞっとしない話だった。兄弟がいらないと言うのは本当のようで、一人っ子だったから学校の送り迎えも父親の舎弟が交代で請け負っていたらしい。それでは友人もできてもすぐに離れてしまうだろう。そのうち適当に一人に選んだのが鷺頭だったという。鷺頭の父親は竜胆の父親の右腕だったらしく、親子二代で組の頭の右腕だよ、と、竜胆は言う。

「嫌だったよ。けどさ、誰も俺を見てくれない。見てるのは結局俺のバックの華門組。やさしかったおふくろも、結局華門の女だった。俺が小学生のときに死んだけど、最後まで弱音もはかないで親父をよろしく頼む、華門をよろしく頼むって言って死んでった」

竜胆はおもむろに立ち上がり、自分の後ろにあった天袋に手を伸ばした。黒塗りの箱や漆塗りの箱がちらりと見えたが、その中にある古びたクッキー缶を取り出して蜜柑のビニル袋の隣に置いた。どこかでかいだような懐かしい匂いがふわりとひろがって、俺の頭の中によくわからないがセピア色の風景が思い浮かぶようでもあった。彼はその缶から一枚の写真を取り出す。まさか写真は白黒でもセピアでもなくカラーだったが、中に映ってる女性は少し化粧が濃く、服装も少し時代を感じさせる。女性の腕には赤ん坊。竜胆だ。今の面影がある。彼と写真の女性とを見比べると、やはり似ている。

「似てるね」

「どうも。ま、死ぬと同時に俺に最大の絶望を与えてった人だけどね」

笑えない。というか、よくわからない。俺は一般家庭で育った一般人だ。彼のような特殊な生き立ちでも立場でもない。竜胆は静かに写真を缶にしまい、丁寧に蓋をすると元のように天袋に戻した。口ではそう言うものの、やはり母親は特別な存在らしかった。竜胆は座りなおし、またマグカップを手取る。

「高校に入ってしばらくして親父が倒れた。しばらくの間は叔父貴が組を動かしてた。でも、俺が継ぐべきだって問答があってね。叔父貴が気に入らなかった奴もいただろうし、逆に俺みたいな若造はいやだとか。結局タマとりたいだけなんだろうけど。ま、そんなの所詮三下だがな」

大人びた口調になり、ちらりと流し目を向けるその表情は鏡に映る自分をにらむあの竜胆だった。けれどすぐに表情がやわらぐ。

「いろいろ面倒で高校も中退してしばらくぶらぶらしてたときに、九条さんの美容室を見つけて入ったら、もう運命かと思ったよ。はは。ゲイにもてない？」

「……ゲイじゃないからわからん」

「はは。当然か」

「竜胆くんはいつからそうなの」

「おふくろがそう言ってから。信頼してた女性が裏切ったって思うともう一瞬で女性不信、だしほら、男の方が自由だよ。面倒じゃないし、やりたい奴とあってそんでさよなら。そんなもんだって思ってたけどさ……九条さんに頭触ってもらって髪切ってもらって洗ってもらってさ当たり障りない普通の会話、とか、すごく……でも俺こんなんだし、だからこんな、触れられるとか思ってたし」

本当に俺のことが好きなのだろう。表情が和らぐ。言葉ではない。その雰囲気や視線が俺を優しく見守っていた。気恥ずかしくなって、二つ目の蜜柑に手を伸ばす。彼は気を遣ったらしくまたいくつか、蜜柑を袋から取り出して座卓に転がした。

「覚えてる？髪の色黒くなってさ、朝一番に九条さん切ってくれたじゃん」

「ああ、あの日。スーツ着てたよな。あの日からあやしいとは思ってたけど」

「あの日、おふくろの命日でさ。ま、結局俺は組を継ぐってその日に腹くくったんだけどさ。墓

参りついでに挨拶もかねて」

「じゃあ……」

ずっと聞こうとして聞けなかったことを聞こうと決意する。マグカップを置いた。いつのまにか濃いお茶も大分少なくなっていた。口淋しかったのかもしれない。向きかけの蜜柑も机に置く。

「頬の、痣は？」

「あ、アレ？あれは叔父貴に殴られてさ。男が好きってのはほとんど周知なんだけど、九条さんをイロにしたって言ったら思いっきり吹っ飛ばされてさ。まあ俺もあいつの鼻はへし折ってやったんだけど」

またも軽い口調で言う。その鼻というのは比喩表現なのか本当の鼻なのかは少し怖かったので聞かないでおいた。また蜜柑をむき始める、が、してはたとしてまた蜜柑を置いた。

「ちょっとまで。イロにしたって、俺の了承もなく、か」

「駄目だった？俺絶対落せるって思ってたけど。九条さん、流されやすいなって前から思ってたし」

「……猛烈に帰りたい気分だ」

「駅まで歩いて三十分、それにもう終電ないよ」

竜胆が膝歩きでこちらによってきて隣で胡坐をかいて座った。くんくんと鼻を動かして、蜜柑くさいな、と屈託なく笑う。

「俺は、九条さんと付き合いたい。もう、迎える準備はしてある。一生添い遂げる覚悟だってあるよ」

「まてまてまてまて、話が一気に飛躍してないか？」

じわじわ近づいてくる竜胆の胸を押し返すつもりで手をおいたが、逆に捕まれてしまう。また心臓が早く動き始める。「飛躍なんかしてない。俺は九条さんが好きなんだ。俺は頭になった。だからもう早々に会えなくなる。そんなのは嫌だから、だから、傍にいてほしい。責任はとる」

「……何回も言うけど、俺は男が好きじゃなく、君はやっぱり兄貴がほしいだけなんじゃ……」

「さっき俺が抜いたのは？あんたの足に当たってたのは？」

「いやそれは……触られたら起っちゃうし」

「俺は、兄貴みたいにいつも一緒にいる鷲頭には起たない。九条さんだからだよ。それに」

彼は俺の腕を持ちかえて、そのまま俺の胸に押しつけてくる。自分の手には自分の鼓動が伝わってくる。こんなに鼓動を早くしたことが、まともにものを考えられなくなるほど熱に浮かされたことが、あったらどうか。俺は、竜胆を、好いている？年の割りにはちょっと大人びていたこと、案外屈託もなく笑うこと、切羽詰って涙を流していたこと、俺に触れるときに指が震えていること。

「……じゃあ、条件がある」

「何？」

「……お、お互いのこともっと知ろう」

「知ってるよ。九条一志、二十九歳、誕生日は七月六日かに座O型、父、母、姉二人、兄一人の六人家族、出身は一」

「ちがうちがうちがう、この際どこでその個人情報を手に入れたかは不問にしてやる。そうじゃなくてさ、君の好きなものとか嫌いなものとか、俺のそういうのとか、さ、そうやって本当は……仲良くなってくものだろ」

「……うん。じゃあさ、従業員と客の垣根は越えてくれるの？」

「まあ……君の努力次第かな」

「はは、何それ」

「……精一杯の年上の意地」

「はっ……俺を誰だと思ってる。華門組の頭だぜ」

竜胆の腕が俺の背中に回る。抱きしめられると、かすかに香水の匂いとたばこの匂いと、そして彼の鼓動が俺にも伝わってきた。なんてことはない。一緒の速度で波打つそれが、ひどく心地よかった。

「あ、これで最後です」

そう言うと、鷺頭は頷いて俺の手からダンボールを受け取った。額の端っこに絆創膏を貼りつけていてどうしたのか尋ねようと思ったが、返答は言葉でなく視線で返ってくるような気がしたので口を閉じた。今までも、彼に何か問うても言葉が返ってくることは少なかった。竜胆とのやりとりを見ても鷺頭が話すことは稀なので、おそらく相手が俺だから、ということはない。たぶん。断じて。

要領よくダンボールをバンに詰め込むと、鷺頭は黙って運転席にのってエンジンをかける。俺はその間にアパートの一回に住む大家さんのところに言って挨拶をすませて、バンの助手席に乗った。車のボディには工務店の名前が書かれていて、その通り車内もおがぐずのような香りがふわふわ漂っていた。俺が乗り込むのを横目で確認して、鷺頭は車を発進させる。いつも思うが彼は運転がうまい。

「一緒に住もうか」

久しぶりに会った竜胆は俺の存在もすっかりなじんだ和室で、夕飯を食べながらあっさりそう言った。一週間に一回は会って夕飯を一緒に食べたい、と提案したのは竜胆の方で、俺の仕事は退勤時間が不確定だから何時になるかは日によってわからない、と言うとそれでもいいと彼はこたえた。一週間に一回というよりは二週間に一回とか三日に一回とか、本当に不定期ではあったけど俺たちは調節して逢瀬を重ねた。というかほとんど飯食って他愛もない話をして、ぐらいただ。触れたのは数回。竜胆はそれだけで満足げだった。ちなみにこの離れにくるときは鷺頭の送迎と夕食がついてくる。

俺は味噌汁片手に固まる。彼の頬には真新しいガーゼが鎮座していて、怪我でもしたのか、と心配になる。どうせ尋ねてもこけた、とかちょっとケンカした、とかそういう高校生みたいな言い訳をされてしまうから敢えて聞かないが。彼はその仕事の一切を俺に話そうとはしない。一ヶ月前、組内小さな勢力が仕事帰りの俺を誘拐し人質にして、組長である竜胆に目をかけるよう強迫まがいをしたことがあった。生まれて初めて拳銃と日本刀を押し付けられては本気で死ぬと思ったが竜胆率いる竜明会に助けられ、その勢力もあっけなく潰された。今は比較的落ち着いているらしい、というのが俺の見解だ。実際、俺を誘拐した彼らがどうなったのかはわからない。組のことについては竜胆は語らないからだ。巻き込みたくないのだろう。こっちとしては十分巻き込まれているのだけれども。とはいえ、一緒に住もうなんていう提案はあまりにも突飛なことだったし、お茶を運んできた鷺頭も思わずといった感じで竜胆を見ていた。やっと言われた意味を理解して聞き返す。

「そんなのいいよ、別に」

「よくねーよ。いちいち会いに行ったりここに来たり、大変だし、それにまた襲われたりしたらさ……こないだはまだ雑魚だったからいいものを。ここなら本宅から離れてるし、鷺頭と叔父貴と他数人の幹部しか知らない。安全だよ。一緒にいる時間も増える」

「けどお前、急すぎだろ。それに行き帰りは申し訳ないけど鷺頭さんが送ってくれてるし」

「急じゃないよ。それに来月アパート更新だろ。引き払っちゃえよ」

「お前またそうやって個人情報を」

漬物に伸ばした手を捕まれ、手の甲にキスされる。鷺頭が静かに部屋から出ていくのが視界の隅にみえた。誘拐されたときについた傷はまだ所々に残っていて、手の甲にも少し大きなかさぶたが残っていた。美容師の仕事に支障はなかったものの、心配してくる店長や宮瀬や森に言い訳するのが大変だった。

「俺が怖いし不安なんだよ。お願い、九条さん。守りたいんだ」

誘拐の一件があったとき、普通じゃない世界の間と付き合いをもつことのリスクを――今までだって考えなかったわけじゃないが――はっきりと目の前に叩きつけられた。付き合うのさえやめてしまいたかった。けれど組長、という肩書きの反面、俺には普通の若者にしか見えない。時折見せる甘えた声や顔は、素直に愛おしい。もし俺が、彼の支えや居場所になっているのなら、と思うといつのまにかこちらからも離れる理由はなくなっていた。

端正な顔で瞳を潤ませてお願いされたら、断れるわけがない。少し考えさせて、と返答するとたちまちいやらしい顔でにんまり笑った。

「九条さんの場合、考えさせてっていうのはほぼOKだろ」

「お前なあ」

彼は俺のツボを心得ているらしい。憎らしく、小気味よい音をたてて竜胆は美味そうに漬物をほおぼった。ちなみにこの漬物も、鷺頭が漬けているらしいのだが。

そんなわけで、俺は引っ越すことになってその手伝いに竜胆は鷺頭をよこした。アパートにバンで乗り付けた彼は、予定時間五分前にドアの前にほぼ仁王立ち状態で立っており、壮観だった。身長は百八十センチをゆうに越えていて筋肉もしっかりしている。髪の毛は短髪、おでこにも頬にもうっすらしわが刻まれているところを見ると俺よりもやはり年上なのだろう。引越しの手伝いだからか、いつものワイシャツにスラックスではなくて、白いTシャツにツナギを着ていて上着の部分は腰に巻きつけてある。いかめしい顔のまま俺に小さくお辞儀をすると、部屋に入ってきててきぱきとダンボールをバンに詰んでくれた。もともとそんなに荷物が多いわけでもなかったのですが、すぐに済んだのだが、その間も特に会話がなく気まずい。働いていても無口なお客さんがいないわけではなかったが、さすがにこの状態であと三十分はつらい。どんな話題を振るべきか思案し、無難に口を開いた。

「あの、鷺頭さんは……今おいくつなんですか」

竜胆と付き合いようになって、もちろん彼の側近役である鷺頭とも行動を共にするのだけれどやはり付き人だからか会話もしないし、いつも遠くから竜胆を見守っていることに徹している。その瞳はもちろん竜胆の下で働く第一の人物であるようにも見えるし、父親のように優しいまなざしにも、兄のように温かなまなざしにも見えた。素直な疑問だった。

そう問うと、鷺頭はちょっとだけ視線を動かしてこちらを見たがすぐに前に向き直る。角を曲がるアクセルとブレーキのバランスも絶妙でほとんど体をゆらすことなく曲がり終える。鷺頭はゆっくりと口を開いた。自分が話すことを苦にしない方だからか、彼のような寡黙な男性が口を開く瞬間は妙に緊張する。低く響く声が、すぐ横から伝わってくる。

「いくつに見えますか」

「えっ……そうだな……三十後半、ぐらいですか？」

「そう見えますか」

「え、ええ、今日の格好はいつもよりも若いからもっと若く見えますけどね」

「……付き人をし始めたのは、頭が小学二年生の時でした。自分はそのとき二十歳、今の頭と同じ年でした」

頭、と言われて一瞬誰かがわからなかったがすぐに竜胆の顔が浮かぶ。小学生二年生だから、と頭の中で大体の計算をする。

「三十…二…？」

「……見えませんか？よく言われますから気になさらないように」

「いやいやいや……ご結婚は？」

「していません」

彼は少しだけ視線をこちらに向ける。縮こまって隠れられるなら隠れてしまいたいほどだったが生憎そんなスペースはない。次の話題を探そうと逡巡していると、いつのまにかバンがコーヒーショップに入っていく。

「九条さんお疲れでしょう。コーヒー買ってきますから少しまっていてください」

返事をする間もなく鷺頭は運転席から降りていった。気が利くのか、それとも気分を害したのか聞くこともできないし、普通の人のように表情があまり変ることがないのでどうしていいのかわからない。こんな落ち着かない気持ちになったのは、久しぶりだ。美容師をしていると、もちろん話が苦手な客や話をふってもうまくキャッチボールのできない客もいるが、こちらは仕事に専念すればよい話だ。けれど、こうして自分が何もすることがない状態に置かれるとなんとも居心地が悪い。話がかみ合わないと思う客も、こういう気持ちになったりするんだろうか。

しばらくすると、鷺頭は紙袋を持って帰ってきた。コーヒーを俺に渡すと袋からサンドイッチを取り出して、丁寧にビニールの包装をといてくれた。どうぞ、と言ってこちらに差し出してくる。

「あ、すみません、なんか開けてもらって」

「いいえ、頭の世話でなれてますから」

「ああ、わがままばっか言いますからね」

「……」

彼の上司を悪く言ったことがまずかったのか、鷺頭は答えなくてコーヒーをすすっている。帰りたい、と、じわじわ心の底からわきあがってくる。泣きそうだ。受け取ったサンドイッチを口に運ぶタイミングもよくわからなくなって、そのままじっと固まっていた。

「……本当のことを言わせてもらいます」

「え？」

彼は鋭い視線を俺に移す。目をそらしたらだめだ、という竜胆の言葉がよぎる。見つめ返す。サンドイッチからこぼれたレタスが、膝に落ちた。平日の昼間、コーヒーショップの駐車場にはこのバンしか止まっていない。もしここでなんかされてもたぶん逃げられない。ずっと冷たいも

のが背中を走る。でも、だめだ、目をそらしたら。

「誘拐された一件で、自分は貴方がもう頭に愛想を尽かすと思っていました。シャバの人間に耐えられるとは思わなかった。別にそれでもいいと自分は思っていました。所詮住む世界が違うんですから。頭が、貴方に入れ込み始めたときはどうせいつもの色好みだと思っていたが、違った。頭は貴方には本気でした。何がそうさせたのか、自分はわかりません。けれど、貴方はシャバの人間でももちろん女を好きでしょう。だから、あの一件がちょうどいい契機になると思った。けれど、貴方は逃げなかった」

鷲頭の指が伸びてきて、レタスを拾い紙袋の中にぽいと捨てる。至極当たり前のようなその仕草は、おそらく竜胆の面倒を小さな頃から見てきた彼の習慣なのだろう。

「頭は、あれでいてとても頭のよい方だ。うまく組を動かしている。だがその反面、馬鹿みたいに脆い。貴方はどれだけわかっているのか、わからないが、貴方がいることが頭の支えになっています。覚えてますか、頭が殴られて貴方のところにいったときのことを」

「ええ、叔父さんに殴られたとかなんとか」

「あれは、本当は叔父貴ではなく父親……四代目に殴られたんです」

「じゃあ、髪の毛も？」

「ええ」

「え、でも竜胆の父親は入院中じゃ？」

「そうです。頭が五代目を襲名したのは実は四代目には内密にされていました。それも全て叔父貴や頭が気を回した結果だったのですが、四代目は納得がいかなかった。それで、あぁなりました」

「そうなんだ……」

「もちろん、貴方のことも頭は四代目に話しました。もともと四代目は、頭がそうであることを好んでいなかったので余計に逆上した……それでも、頭は貴方を諦めなかった。貴方も、それに答えた」

鷲頭は体をこちらにひねって、深々と礼をした。

「あの人は、竜胆さんは、小さな頃から親からの愛情を十分に受けていないと思っていらっしゃる。どうか、貴方が、九条さん、あなたが竜胆さんを愛してやってください。この鷲頭、不肖ながらも残りの人生かけまして頭と九条さんを守っていく所存でございます」

「いや、あの、鷲頭さん、あの」

OLの様な女性が二人、車内をなんとはなしに見ていく。目があって、彼女たちは笑いをこらえようとしているのか変な顔をして、すぐにそらした。俺も相当泣きそうな顔をしているに違いない。

「鷲頭さん、顔をあげてください、お願いします」

彼はゆっくり顔を上げる。その瞳はさっきまでのよそよそしさや定めるような光はまったくなく、柔らかくこちらを見つめている。ほっとしたような、いいのか、悪いのか。彼にとって竜胆は、大切な組の頭であり弟であり息子のようなものなのだろう。恋愛とはもちろん違う、献身的なそして慈しみにあふれている。

「俺みたいなので竜胆の相手が務まるかどうか……よろしくお願いします」

一瞬、でも確実に、鷺頭は微笑んだ。怖い顔に似合わない、可愛らしい笑顔だった。

離れについて、ダンボールを運び込む。今までは空っぽだった竜胆の寝室になってた部屋が、俺の荷物で一杯になる。荷解きは後にしようと言って、鷺頭はお茶を入れてくれた。台所にあるテーブルで、二人で向かい合ってじっと飲む。会話はやはりほとんどないが、さっきよりも打ち解けた雰囲気になっているのが、ほっとした。

「九条さん、さっきの嘘ですよ」

「はい？」

唐突に言うし、彼の表情もとくに変らない。悠々とお茶をすすっている。俺は何がだろ、と逡巡しながら彼と交わした会話をいくつか思い返す。

「年齢です」

「え？」

「自分、今年で四十二になります」

「え」

「さすが、美容師さんだからか人の年というのを大体当ててしまえるんですか。思わず悔しくて嘘をついてしまいました。頭はいつも嘘をつくんですが、気分が分かったような気がします。小さな嘘でも、九条さんのようにころっとだまされてしまう人は気持がいいですね」

「え？ええ？」

鷺頭は相変わらず無表情で、お茶をすすっている。これは打ち解けた証拠なのか、どうなのか。くすっと、鷺頭が笑う。

夜、布団の中で、鷺頭に嘘をつかれたというと、竜胆は彼はもう結婚していて子どもが三人いて三人とも女でこれがまた美人だ、ということを知ってくれた。

「鷺頭が嘘をつくって、あいつそんな茶目つけあったの」

「こっちが聞きたいよ、ヤクザってみんな嘘ばっかついてんじゃないか」

「はは、たぶん俺に鬱憤たまってるから鷺頭も遊び道具見つけたんじゃない」

「あのなあ」

「九条さん」

竜胆の指が俺の頬を撫でる。肌を重ねたのかまだほんの数回しかないけれど、彼に対する愛おしさは日増しになるように思えた。

「俺も、ずっと九条さん守ってくから。もうあんな目に絶対にあわせないから」

「ん、頼んだ」

「はは、軽い」

抱きしめられる。こっちからも抱きしめ返す。

あたたかな、夜だ。

E N D